

10年目の区切りに－2006年度生の動きと活躍

留学生センター・短期留学部門 助手

筆 内 美 砂

はじめに

2006年度は名古屋大学短期交換留学受入れプログラム（NUPACE）の設立10周年を記念する節目の年であった。同年の秋学期に受入れた交換留学生数（以下、NUPACE生）は過去最大（46名）を記録し、春学期からの継続NUPACE生を合わせた計58名と、NUPACEを修了した元交換留学生（以下、アラムナイ）、また名古屋大学から海外協定校に留学した名古屋大学生（現役および卒業生）とともに、同プログラムの10年の軌跡と学生の留学体験を振り返る年となった。

本報告では、実施2年目となった「ヘルプデスク」の活動と、NUPACE設立10周年記念行事に関わったNUPACE生と日本人学生の動きを紹介する。

1. ヘルプデスク

1-1. 活動概要

ヘルプデスクは毎新学期、名古屋大学に入学する新規留学生（特にNUPACE生や留学生センターに所属する留学生）の受入れをサポートするため、2005年度春学期に立ち上げた活動である。「ヘルプデスク」を「キャンパスや生活全般について気軽に質問できる場所」と位置づけ、留学生センターのロビーを活動の拠点とした。ここに有志の学生（先学期から継続して在籍しているNUPACE生や名古屋大学生）が各自の空き時間を利用して集まり、新入留学生のサポートに入る。サポートする学生は新入留学生の質問を受けるだけでなく、状況に応じて新入留学生とともにセンターの外に出て、必要な情報を提供したり、キャンパスを案内したりし、自由に活動範囲を広げられる。活動期間は新学期開始後の3週間とした。

「ヘルプデスク」は学生自身が主体となって活動に参加することを目指している。主たる目的は①学生の

情報源を最大限に活用し、学生同士の助け合いを促すこと、②留学生と名古屋大学生が出会うきっかけを作ること、の2点であるが、2006年度はその成果が多いに発揮された。

1-2. 2006年度の活動

2006年度は前年度に比べ、ヘルプデスクに参加する有志の学生数が伸び、中心となって活動を盛り上げた学生の活躍が大変印象的であった。先学期から在籍しているNUPACE生（以下、継続NUPACE生）と海外留学を予定している名古屋大学生、また留学から帰国した名古屋大学生に加えて、友達を通してこの活動を知り、顔を出す学生も増えた。合わせて、教育交流部門が実施している「パートナーシップ（日本人学生と留学生を1対1で紹介するプログラム）」に登録している学生も、ヘルプデスクの参加者の増加に寄与している。

ヘルプデスクでサポートに入る学生は、基本的に活動時間（シフト）を決めない。それは新学期という季節柄、学生自身の予定が確定しづらいことを配慮しているためで、授業の合間の短い空き時間にも協力できる（参加してもよいと思える）気楽さにつながっている。しかしこのやり方では、自然と学生が集まる時間帯にもばらつきが出る。

このような状況の中、初年度から大きく進歩したことは、学生が昼休みの時間帯を最大限に利用するようになったことである。名古屋大学の異文化交流サークルACE（Action-group for Cross-cultural Exchange）メンバーが、留学生と一緒にロビーでお昼を食べることを提案したことで、2006年度の活動は一気に盛り上がりを見せた。ヘルプデスクのパナーを目にして集まる留学生、ACEメンバー、またヘルプデスクを通して出会った有志の学生が声を掛け合い、ロビー全体に打ち解けた雰囲気生まれた。お昼を食べながら談笑することで、ヘルプデスクの目的である「情報交換」

と「仲間作り」が最も自然な形で実現されたと言える。また学生自身の働きかけによって生まれたこの変化は、学生の自主性が活かされたという点からも評価したい。

ヘルプデスクを立ち上げた背景は、2005年度報告（『名古屋大学留学生センター紀要』、第4号、P.169-170）に紹介しているが、2006年度を振り返ると、ヘルプデスクがとりわけ学生の交友範囲を広げるきっかけとなったことは顕著である。特に留学生と名古屋大学生の接点が増えたことで、活動終了後も、個人間の友情が育まれたことは喜ばしい。

1-3. ヘルプデスクの課題

ヘルプデスクの課題は、活動に携わる学生層が定着していないことである。参加の呼びかけの対象となる学生は前述のとおりだが、特に積極的に参加する継続 NUPACE 生、海外への留学を予定している名古屋大学生、また留学経験者の顔ぶれは、毎学期大きく入れ替わる。（継続 NUPACE 生は次学期にはプログラムを修了して帰国しており、名古屋大学の留学予定者は海外に飛び立っている。留学を終えた学生は就職活動や卒業のため活動に参加できなくなる。）そのため、継続してヘルプデスクの活動に携わる学生の基盤が築かれていない。何回か活動を経験すれば学生自身が改善点を見出し、次学期に活かすことも可能となるが、個々の学生の単発の活動になりがちで、活動経験が効果的に引き継がれない側面が残る。

活動の中心となりうるのは ACE メンバーであるが、同サークルは、これまで長く取り組んでいる全学的な受入れサポート（大学宿舎の入居者サポート、留学生の出迎えなど）に役割が分担され、ヘルプデスクはあくまでも有志が空き時間に参加する活動に留まっている。

ヘルプデスクの効果をより発揮するためには、教育的観点から、学生の自主性を尊重し、学生が主導して運営する活動が理想と考える。しかしこれを可能とするためには、活動のノウハウを共有し、中心となって活動しうる参加者を固めることが重要となる。継続的に取り組むための人材確保と基盤作りが課題であろう。

2. NUPACE 設立10周年記念シンポジウムと同窓会イベント

2-1. 現役 NUPACE 生と名古屋大学生による作品展示

2006年10月26日と27日の2日間に渡って、NUPACE 設立10周年記念イベントが開催された。同イベントは初日のシンポジウムと翌日の同窓会によって構成されたが、2006年秋学期入学（9月末に来日）の46名にとっては、留學生生活の始まりの時期と重なり、イベントへの参加は大きな刺激となった。

現役の NUPACE 生にも積極的に参加してもらうため企画したことは、アラムナイの写真とメッセージを結集してポスター展示することであった。10周年を機に、世界に散らばるアラムナイに留學生生活を振り返ってもらい、その体験や思い出を寄せてもらうという構想である。アラムナイへの呼びかけは短期留学室で行い、集まったものを編集し、ポスターとして張り出す作業は、現役 NUPACE 生と有志の名古屋大学生とともにいった。

現役学生の力が発揮されたもうひとつの目玉は、過去10年の時事を振り返るポスター展示である。1996年に発足した NUPACE プログラムを、世界のさまざまな出来事を通して振り返るという狙いで作成された。当時の流行、政府の動き、自然災害など、各国の時事が自由に取り上げられ、学生の個性と創造力を活かした作品が出来上がった。

ポスター展示の企画の段階で少なからず心配されたことは、到着して間もない NUPACE 生がいかに関心を示し、作業に取り組めるかということであった。新規の学生だけでも46名、継続 NUPACE 生を入れると58名という大所帯の上、まだお互いのことを十分に知らない時期であったため、どこまで学生が積極的に参加し、連携を取れるかが挑戦であった。

結果的にこのポスター展示は大成功を取めた。特に NUPACE 生とともにポスター制作に取り組んだ名古屋大学生との共同作業は、ヘルプデスクの活動の延長として、学生間の協力関係をさらに促す機会となった。また、アラムナイの写真やメッセージを編集する作業は、先輩たちが留学経験をどのように捉えているか、何を心得て帰国しているのかを知る機会ともなり、自分自身の状況や環境をあらためて考えるきっかけにもなったと思われる。

2-2. 同窓会開催の意義

留学を終えた学生にとって、自身の異文化体験を振り返ることは、帰国後何年経っても大切なプロセスである。同窓会は学生の記憶を呼び起こし、留学後の内面的な変化・成長を考えるきっかけを提供する機会である。今回初めて開催されたNUPACEおよび交換留学経験者の同窓会は、年代を超えてお互いの経験を共有し、留学経験の成果を確認し合う場として盛り上がりを見せた。さらに、アラムナイのその後の進路と活躍を知ることは、プログラム関係者はもちろん、大学の国際化に携わる学内外の関係者にとっても興味深いものであり、プログラムの意義と指針を見直すきっかけとなったであろう。

海を超えて活躍する留学生の輪をいかにつなげ、ネットワークを広げていくかが今後の課題である。10周年を機に、データベースの充実化や名古屋大学に関する定期的な情報発信など、一層の取り組みが望まれる。

おわりに

設立10周年の節目を迎えたNUPACEプログラムだが、目下の課題は受入れ枠の増加である。現状では、大学宿舍の収容可能人数の規定により、受入れ枠は毎学期60名に制限されている。しかし、名古屋大学との学生交流協定締結校は年々増加の傾向にあり、世界的にも学生交換の関心は高まっている。このような状況の中、NUPACEへの応募者数（さらに自費でも参加したいと希望する学生数）は高い数を示しており、応募者の競争の激しさは軽減されていない。NUPACEでの留学経験を活かし、世界で活躍するアラムナイの声をあらためて聞き、来る10年もより多くの留学生を受入れられるよう、大学関係者の理解と支援を願ってやまない。